W校中高等部だより
のみの市特集

平成二十六年（２０１５年）十一月十四日
ニューヨーク補習授業校W校

九月よりのみの市委員を中心に計画を立ててきましたのみの市が十一月十四日盛大に行われました。

中等部一・二・三年生・高等部による四つのグループに分かれてブースを出し、各学年とも幼児部初等部向けのゲームコーナー、各家庭から出品していただいたバザーコーナー、保護者の方々からなるベーク製品コーナー、そして生徒たちのアイデアを凝らした食べ物コーナーに分かれて出店しました。

九月から始まったのみの市委員会では、まず最初に収益金の寄付先を決定しました。今回の寄付先は【東日本大震災支援】東北子ども夢応援団プログラムとして岩手県陸前高田市の小学校のグランド、遊び場の整備などに援助を行っている団体に預けることに決定しました。二か月の取り組みで、各クラスの出し物を決定したり、幼児部初等部向けのゲームを決めたり、各出し物の担当者を決めたりと毎週忙しく会議を重ねてきました。意見が合わないこともあったり、思いが同じであったりといろいろなドラマがありました。

のみの市当日。保護者の方々による準備から始まり、一二時少し前にはすべての準備が整いました。幼児部のかわいいお友達が来場したところから会場内は緊張感が広がり、のみの市の雰囲気が高まりました。初等部の保護者の方々や生徒の皆さん、一般のお客様、卒業生など来場してくれ、一時は身動きが取れないほどの混雑ぶりになりました。すべての生徒が忙しく体を動かし、お客様のために最高の笑顔を作り、とても一生懸命頑張っていました。

計画に大きなずれもなく、のみの市は無事終了し、保護者の助けを借りながら後片付け、そして各クラス会計担当による集計も終了しました。最後に今回の集計結果が生徒会会長の前田さんから発表され、収益金の合計は３１７４ドル３セントでした。過去最高の売り上げで３０００ドルを超える結果になり、大きな歓声が上がりました。生徒たちはこの達成感を忘れることはないでしょう。

のみの市当日、またのみの市開催に至るまでの過程で色々とご支援いただきました保護者の皆様方には心から感謝申し上げます。

のみの市

中等部一年　ビエム　アディア

私は、幼児部の時に初めて、のみの市に来たことを覚えています。自分の体より大きいような紙袋を持って、お金を持って買い物をしました。その時は中等部や高等部の人たちは、大きいお姉さんや、お兄さんだと思っていました。だから、今年、自分たちがのみの市をするのが不思議な感じでした。そして、小さい子達が来た時に、「かわいいなぁ～」と思いました。

ゲームコーナーでは、大きな声で、「ストライクアウト！　楽しいよ～！」と、ショーン君が叫ぶと、子供たちが寄ってきて、行列ができてうれしかったです。私もまねをして言ってみたけれど、声が小さすぎて誰にも聞こえなかったようです。フルーツポンチの売り場では、私はゼリーを入れる役でした。てきぱき動かないとリズムが合わないので、チームワークがとても大切でした。おいしかったので、サンクスギビングに作ろうと思っています。雑貨売り場では、私はおつりを渡す役をしました。慣れてくるとスムーズにできました。



今年集まったお金が、今までで最高だったと聞いた時、私は疲れてくたくただったけど、すっかり元気になりました。この集まったお金が、私の全然知らない人の役に立つと思うと、自分の心も暖かくなりました。

初めてののみの市

中等部一年　パルミエリ　ケイシー

今年ののみの市はいつもとちがうのみの市でした。今まではのみの市で買う方でしたが、今年は中一だから売る順番になりました。ぼくは初めてのみの市で売るのをとても楽しみにしていました。でも、ぼくはどうしたらこんな大きな責任を果たせるか少し不安で、緊張していました。何を言えばいいんだろう。どうやってお金を管理すればいいんだろう。ぼくはこんなことを思って雑貨売り場に行きました。幼児部の子たちが来てくれて、思ったように声を出せなかったけれど、ぼくが出した雑貨を買ってくれてうれしかったです。ぼくは接客があまり上手ではないので、二回目はもっと得意な会計をしました。得意なところでがんばることができて楽しかったです。

ベークセールではお客さんがあまりいなかったので、みんなで相談して値段を下げることにしました。するとお客さんが来てくれて、ぼくたちは全部売り切ることができました。全部売り切れた時、がんばったことの達成感を感じました。

ぼくの一番好きなステーションはフルーツポンチでした。ぼくはソーダ係でした。たくさんのお客さんが買ってくれてぼくの作ったジェローを食べておいしいと言ってくれてうれしかったです。

初めてののみの市は最初は不安だった気持ちが最後は楽しい気持ちに変わりました。来年はもっと接客をがんばりたいと思います。

のみの市

中等部二年　フォング　小山笑鈴

のみの市は毎年あるけれど、去年のと違って、とても楽しかったです。今年はタコスを作る予定になってとても嬉しかったです。出し物の当番の時は、一人一人違う仕事があってよかったです。たとえば、一人がタコスのカラに肉を入れた

ら、もう一人がレタスを入れたからけっこう早くタコスを作れました。

今年のゲームは幼児部の子供たちの間で人気でした。子供たちは一生懸命全部のボーリングのピンを倒そうとしていました。私は写真を撮って楽しかったです。幼児部のこの真剣な姿や、クラスの楽しんでいる姿を写真で撮れておもしろかったです。



今年ののみの市で好きだったのは、一人一人違うスケジュールだったから、毎回場所を変えた時、クラスのほかの人と働けたのです。ずっと同じ人といなくて、グループが毎回変わっておもしろかったです。

今年ののみの市は全体的によくできて、とても楽しかったです。出し物のタコスはユニークで、作るのが好きでした。小さい子達はボーリングを楽しんでいて、よかったです。また来年ののみの市を楽しみに待っています。

のみの市

中等部二年　保山　健人

今日、補習校でのみの市が行われ、僕は行事を通してみんなとよりきずなを深めることができたと思いました。二、三週間くらい前の準備から、今日片付けが終わるまでの間ずっと、クラスのきずなが深まっていったことに僕は気付きました。寄付先や出し物を決めている時から、普段はあまり話さない人が会話に参加したり、いつもはあまりものを一緒にしない人達が、商品を協力して売ったりしている姿を見ました。どうすればいいか分からない時に大人より先にクラスの人と話し合い、自分たちで解決する事によって、新しい人と話したり、クラスのメンバーと協力をしたりして問題を解くことができました。その事により、相手の考え方や、話し合わないと気付かないクラスメートの特徴などが分かって、皆クラスの一人一人のことをよりよく知ることが出来たと思います。

僕も、普段ならあまり話し合ったり一緒に活動したりしない人と働いて、

「まじめにならないといけない時は、この人は本当はきちんと集中して、まじめに自分のやらないといけない事ができるんだ。」

ということに気付き、さまざまな新しい事を学ぶことができました。

クラスの皆と良い友達になることができたので、僕はのみの市を通してすごく良い経験ができたと思います。楽しいことだけではなく、一人一人の事をより深く知り、クラス全員のきずながより深まりました。生徒全員が将来、大人になった時にやらないといけない仕事の訓練にもなったと思うので、僕は翌年も、その翌年ものみの市をやり続けられたらいいと思います。今年ののみの市は、ぼくの一生の思い出として残ると思います。

蚤の市の一日

中等部三年　細野　露可

先週、「蚤の市」が開催されました。生徒たちは各クラスごとに品物を出品したり、雑貨を売ったり、ベークセールをして昼食のおかずやお菓子を売ったりもしました。我々中三は、幼児部にはコイン落としゲームをして、一般の方々には、「わらび餅」と「抹茶のライスクリスピートリート」を家で作って持って来て売るというお店を出しました。

最初は、幼児部と小６のコイン落としから始まりました。みんなコイン落としの一円玉を的に当てるのに夢中になり、長い行例が出来ました。幼児部の元気な声と笑いに、一日分のエネルギーをもらいました。幼児部の子たちは、とても丁寧で礼儀正しくて、見習わなければと思いました。

その後、一般の時間になると、僕は宣伝係に抜擢され、蚤の市への協力をひたすら頼んで回りました。来てくれた人には、あの幼児部の子たちを見習って、大きな声で、「ありがとうございます。」と何度もお礼を言い続けました。



十二時から一時半のラッシュで混み合う間、次はベークセールの担当になりました。ベークセールの売り場では、セールスマンのように、いろいろと工夫して広告しました。「このケーキは、甘さ控えめで美味しいですよ。」と言うと、相手のお客さんの目が商品に釘付けになりました。

今回の蚤の市では、全部で三千ドルの売り上げとなり、三千ドルを越えたのは、今回が初めと聞いて、すごく嬉しかったです。

蚤の市は、困っている人を助けるための募金活動として素晴らしいと思います。若い世代の我々に商売（ビジネス）のことを教えてくれて、何より自分たちの出店する商品をクラスで考えたりするのも、とても楽しいです。

最後に、この蚤の市は、自分だけでは出来ませんでした。僕はライスクリスピーを二度も作ってくれた母を含めて、協力してくださった保護者の方全員、そして先生方に感謝したいと思います。

のみの市２０１５：感動と後悔

中等部三年　福島　大朗

今年ののみの市は、今まで売り上げたことのない計三千ドル超を達成しました。うちのクラス、中三は売上げ的に六九四ドルほどで二位でした。と言っても一位の高等部とは四〇〇ドル以上の差で圧倒されました。ま、出し物の単価が高いのでしょうがないですが。それでも、十分皆の努力は報われたと思います。

他のクラスのことはよくわかりませんが、中三は去年と比べて人数は半分ほどに減少したことに加え、個人的な都合でほとんどみんなが集まって話すという機会がありませんでした。僕も野球の試合が補習校の日と重なり、早退などが少な

くありませんでした。なので、僕は全くと言っていいほどクラスでののみの市の会話を聞いていませんでした。メールなども一切送られてこなかったので、僕はほとんど何をやるのかさえ分かっていませんでした。僕の母は保護者会の役員なのもあって、凄いプライオリティーというかやる気がありました。ほぼ毎日、のみの市のことについて聞かれ「クラスで何が決まったの？」や、「当日誰がいるの？」だったり、いろいろ聞かれました。しかし、ほとんど「知らない、分からない」などで終わらせていた僕は、正直、やる気が去年と同様に欠けていました。クラスの出し物として、抹茶ライスクリスピートリートとわらび餅はちょっとショボイなと思っていました。多分、母が一番僕のやる気のなさを感じていたと思います。



しかし、当日の販売時間になると、わらび餅は飛ぶように売れていきました。買いに来てくれた人が「このわらび餅は作ったんですか？蜜も手作りですか？」と聞かれて「はい」と答えると、そのお客さんはとてもびっくりしていました。正直、わらび餅がこんなに人気があるものだとは思っていませんでした。そういえば、何度も買いに来てくれる人もいました。クラスのみんなはわらび餅が人気があることを知っていて、クラスの出し物に選んだのかということがわかりました。家に帰って、母が持ち帰っていたわらび餅を一口食べた時、その人気に納得しました。おいしいっ、自分の未熟さとアマチュアだということを改めて感じました。

それに反して、一方の抹茶ライスクリスピートリートはさっぱりでした。メインはこっちのはずなのに、最初は全く売れませんでした。そこで、僕たちは値段を下げたり、のみの市の会場の外へ売り込みに行ったりました。僕も宣伝のポスターを持って第一カフェテリアへ行きました。でもその時、誰かがわらび餅の値段が高いと文句を言っていたのを聞いて、イラッときましたが、買ってくれたのだから、ま、いいやと思うことにしました。

のみの市は、幼児部の子供たちから始まります。幼児部の子供たちが買い物に来てくれた時、僕は雑貨売り場を担当していました。僕は一人の男の子が僕たちの売り場のテーブルに置いてあるおもちゃを見ていることに気付きました。きっと欲しいのかなと思い、声をかけてみました。その欲しがっていたおもちゃが二ドルだと教えたとき、「三つしかコイン（quarter）を持ってない」と言ったので「あと五つコインをお母さんにもらってきたら買えるからね。大丈夫、このおもちゃ隠しておくから」と言ってテーブルの目立たない所に隠していました。しかし、その後、僕は出し物のほうをやっていたため、雑貨売り場には全く戻りませんでした。なので、その子がお母さんと一緒に戻ってきてくれたのかどうかはわかりません。もし戻ってきてくれたとしても、僕はそのおも

ちゃのことを誰にも伝えていなかったので、そのおもちゃを見つけてもらえなかったかもしれません。自分の愚かさのために、あの子との約束を破ってしまったのであれば、当分悔いが残ります。あの時、二ドルの値段をその子が持っているお金で買える値段にしてあげればよかったのかもしれません。でも、僕は独断で値段を変えていいのかわかりませんでした。ボランティアに来てくれていた保護者の人に相談すればよかったのかもしれません。このことで何よりも引継ぎをするということの大切さを思い知らされました。

来年も僕がいるとすれば、この様なミスを繰り返したくはないです。その子にまた会えたら謝りたいです。そして「また、のみの市に遊びに来てね」と伝えたいです。

高等部一年　小野　元暉

のみの市

十一月十四日に補習校で例年ののみの市が行われた。これは食べ物やいらなくなった日用品などを売り、集めたお金を寄付する行事である。今年は東日本大震災の復興プログラムに寄付することになった。

今年は高等部として初めてののみの市であり、もっとリーダーとしての立場を取らなければいけなかった。果たして自分にそれができたかはあまりよく分からないが、高二の先輩たちが指揮を取る様子を見て高等部は中高等部すべてを引っ張って行く存在だということを実感した。

そのほかに以前との違いはのみの市の前日にみんなで集まってクレープを焼くことだった。前日の夜、高等部はクラスメイトの家に集まり、泊り込みで翌日のクレープ作りの準備をした。具のフルーツを切ることや、肝心な生地を焼くなど、仕事は様々であったがみんな精一杯励んだ。しかし、普段は何気なく食べるクレープの生地を焼くがどれくらい難しいかということに直面した。僕ら高一はどうやってもちゃんとした丸い生地ができなく、大変な思いをした。こういった難題にも困らされたが、何とか乗り切り、のみの市の準備は無事終了した。

のみの市当日、高等部は下準備を済まし、開店を待った。やがて、幼児部、六年生、そして一般の方々がきて、みんなはそれぞれのシフトの仕事を頑張ってこなした。もう高等部は何度もこののみの市をやってきているので特に問題も混乱もなく、速やかにすんだ。みんなで必死に焼いたクレープは飛ぶように売れ、夜中まで焼いた努力の成果が出たと感じた。また、親たちが作ってくださったベーク品も同じようにどんどん売れた。幼児部用のもぐらたたきも人気があったようで何もかもうまくいき、とても良かったと思った。



結果として、今年ののみの市は今まで一番多い合計三千ドル以上稼いだ。この大成功は中高等部はもちろん、支えてくれた親や先生たちのおかげだと自分は思う。この毎年行っているのみの市は確かに大変だが、クラスや学校、そして人との間に絆を築き上げる大切な行事だと感じている。来年ののみの市は僕たち高一にとって最後となるので、今まで以上に盛大に盛り上げてたいと思う。

のみの市

高校2年　加藤　千晶

私にとって最後ののみの市が終わってしまった。あっという間だったような長かったような。私にとってのみの市とは日本で言う文化祭のようなものだ。私が生きてきた一七年間は、ほとんどニューヨークで過ごした。いつも私にはなかった『青春』と言うものに憧れていた。なので漫画などの文化祭のエピソードでキャラクターたちが楽しく文化祭を楽しんでいる場面を見ると、ついついうらやましくなってしまう。補習校ののみの市は日本の文化祭ほど大規模なものではないが、クラスが一丸となり、がんばって寄付金を集めようとする大切なイベントだ。とくに高等部に上がると自分たちが中心となり、のみの市活動を進めるのでもっと楽しい。

今年も毎年恒例のクレープ作りに励んだ。今年は我らの生徒会長の家で集まることになった。クレープ焼き機がうまく使えなかったり、全部切ったと思ってた苺が6パック残っていたり、いろいろなハペニングがあったがクレープ作りは成功した。しかし安心するのはまだ早かった。本番は土曜日、お客さんたちに出し物や食べ物を売るときだ。まず最初の失敗は、一二時四〇分頃のシフト、保護者が子どもを連れてやってくる一番忙しい時、クレープのステーションに高一の男子たちを置いてしまったことだった。のみの市のクレープ作りは初めての高校一年生。あたふたしていたので休憩のシフトだったはずの高校二年生のグループが手伝うことにした。そのあと、シフトのスケジュールがずれてしまった。私たちの学年はどうしても毎年シフトがずれてしまう。各テーブルにタイマーのような物を置いておくといいだろう。二つ目の失敗はホイップクリームの量だった。去年はクレープを作っている間にホイップクリームが無くなってしまった。『今年はそうはさせない！』と思い、少し多めに買ってしまったホイップクリーム。最終的に四、五本残ってしまった。

私はのみの市の前の晩、二時間しか寝ていなかったため、ものすごく疲れていた。頭痛がして目が半分閉じている状態で私は家へ帰った。この時はあまり実感していなかったけど、そうなんだ、のみの市は終わってしまい、私はあと四ヶ月で補習校を卒業する。中学一年生の時から参加していたのみの市。しかし今年のは特別だった。集めた寄付金は過去最高を突破した。みんなの知恵と力を会わせて大規模なモグラたたきを作って、具たくさんのクレープをお客さんたちに食べてもらえた。そしてたくさん思い出を作った。『私には青春がない』と思っていた私は何を考えていたのだろう。私にとっての『青春』は補習校だ！そして来年の高校二年生も、再来年の高校二年生も、その次もその次も、そう思えるようにみんなのみの市を大切にして、精一杯頑張って楽しんでほしい。










TACOS!
タコス